(3) 幼年時代 青年時代 地方のボヘミアン

トラークルの伝記作者としていつも残念に思うのは、詩人の幼年時代初期については、その後の生涯を照らし出す本質的な情報がないということである。逸話風の報告さえ欠けている。ゲオルクとともに家族の中で成長した人物、あるいは遊び友達として親しかった人物、そういう人々の証言は、大部分かなり後の発達段階と関係している。しかしやはりこの少年は、幼年時代初期でも、外界から獲得した一定の諸経験を土台として、十分根拠ある心的行動をなしたに違いない。そこでこの行動を見れば、われわれの詩人にとってこの上ない特徴となっている、《特異な》現実咀嚼のあり方が、もっと分かりやすくなるかもしれないのだが。《ゲオルクも私たち他の者と同じように、快活で、やんちゃで、健康な子供でした》という点では、弟フリッツ・トラークルと姉マリア・ガイペルは一致している。そしてガイペル夫人はこれを補足しながら、次のように伝える。子供の時ゲオルクは、丈夫な体にふさわしく、特別乱暴で腕白でした。特に二人の姉さんを叩いたり、つねったりしたものでした。

事実子供たちの写真を見ると、トラークルは元気一杯で、ごつい印象さえ与える。人間学者テオドル・シュペリは、二歳時の写真に対してこう注釈している。ゲオルクはこの写真では《一風変わっていて、同年令の子供とはちがって見える。赤っぽいブロンドの巻き毛が、少女のような、丸々した腫れぼったい顔を取り巻き、この顔からは鈍い眼が、なにか動物じみた悲しそうな眼がのぞいている。》四人の兄弟姉妹と一緒に写った三歳時の写真も（グレートルはまだ生まれていなかった）、シュペリによれば、外見は鈍重でいくらか生意気な感じがする。

陸軍少佐トラークルは、たびたび引用したインタビューで、《兄さんのゲオルクはどんな子でしたか？あなたたちは仲が良かったんですか？》という質問に、外交辞令的返答をしている。《私たちは最良の遊び仲間でした。ゲオルクは、私たちの庭にある体操用具で、友達と遊びました。私はおもちゃの鉛の兵隊を持っていました。》すなわち、ゲオルクの生家だけが、広大な中庭を所有していたのである。向い側の住まいを手にいれたとき、トビアス・トラークルはプファイファー通り三番地に大きな庭地を買入れた。その庭で、子供たちは家庭女教師の監督下に、一日中遊び興じたのである。

遊び共同体としてのトラークル家の子供について語る場合、年齢の互いに近い兄弟姉妹、グスタフ、マリア、(あるいはミッチィ)、ミンナ、ゲオルク、フリッツそれにグレーテをいつも意味している。異母兄ヴィルヘルムを考えに入れることはできない。彼はゲオルクの長兄グストルより、13歳も年上だった。だから他の子供たちとは合わなかった。ヴィルヘルムを、子供たちは決して異物とは感じなかったものの、家を離れたのは早かった。商人としての見習いを、ほんの一部分だけ父の店で済まし、たびたび外国へ出かけたし、後には広い範囲に渡って商用旅行をして回った。こんなわけで、かなりの長期間ニューギニア、メキシコ、合衆国に（ニューヨークにも）滞在した。この身近な家族の実例が――恐らく冒険に出かけるランボーの先例以上に――薬剤師ゲオルク・トラークルに似たような放浪計画（アルバニア、ボルネオ）を起こさせたのかもしれない。ヴィルヘルムが1910年5月家族を訪ねたとき、父が死んだ。海外へは引き返さず、その時から継母と一緒に、孤児となった商会を1913年の解散時まで続けたのである。ゲオルクは子供としては――どちらかといえばその身体的傾向にもかかわらざ――熱心な話の聞き手だったことをマリア・ガイペルは思いだしている。なかでも《マドゥモワゼル》のお話を聞くのが好きだった。自分で読めるようになると、普通の子供本、童話、ゲルマンやギリシャ・ローマの英雄伝説、《レーダーシュトルンプフ》や《ガリバー》を、学年が進むとゲルステッカー、ヴェルネ、エーバース、ダーン等の小説をむさぼるように読んだ。《小フランスグラビア雑誌》や《青年ジャーナル》等といったフランスの青少年雑誌も、家庭女教師が予約していたが、トラークル家の子供の間で熱心に読まれていた。ガイペル夫人の証言によれば、ゲオルクはさらにカール・マイの熱列な読者だった。奇妙な結び合わせだが、1912年4月初旬、トラークルのルートヴィヒ・フォン・フィッカーと《ブレンナー》サークルとの出会いを仲介したあの男、

若きヴィーン詩人ロベルト・ミュラーは、自分自身この青年作家カール・マイの熱狂的信奉者だったし、同じ時期（1912年3月）マイの――ただ一度の――講演さえヴィーンで実現させたのである。その限りではトラークルのカール・マイに関する詳細も興味ないこともない。（周知のごとく、マイはこの講演旅行で重い肺炎を患い、ラーデブルで死去した。）

六歳になって、ゲオルクは就学年齢を迎えた。1892年秋、父は息子を、ザルツブルク大学広場にある帝室並びに王室の師範学校に付属する、カトリック系の《練習学校》に入学させた。それは普通の《国民学校》の5年制クラスにはほぼ近似する、公法で認められた私立学校だった。ここでは、中流上層階級の子供たちが勉強していた。ゲオルクはプロテスタントだった。そこで週に二回、福音派牧師館の午後の宗教授業に出席していた。宗教を教えていたのは、牧師アウミュラーだった。恐らく彼はゲオルクに洗礼も施したのであろう。《驚くばかりの善良な人間で、トラークルはいつも彼を慕っていた》（ブッシュベック）。

エアハルト・ブッシュベックは1889年生まれで、同じようにザルツブルクのプロテスタントの子だったが、ゲオルクとの最初の出会いを、詳細に記している。《トラークルの思い出は国民学校の時まで遡る。私が通っていたザルツァハ河岸のプロテスタントの学校で、宗教授業を受けるために、姉と一緒に待っていた彼の姿が、今でも眼の前に思い浮かぶ・・・長い金髪のちっちゃくて小ざっぱりした少年で、フランス人の家庭女教師に付き添われていた。私たち普通の生徒からみると、午後だけたびたびやって来て宗教授業を受ける者には、何か特別の「上品らしさ」がいつもあった。しかしトラークルには、その上さらに他の者を避ける様子、内気な孤独の欲求が現れていた。それでも私たちは、当時なんとなく気が合い、話を交わし、知り合いになった。その後ギムナジウムでは、彼は私より一学年上だった・・・」

ここで初めてトラークルの内気な本性、《孤独の欲求》が語られている。つい先ほど、われわれが親しい証言者たちから聞いたところでは、トラークルは快活で、乱暴な、それどころかやんちゃな少年だったし、何れにしろ強くて、健康な、ということは社会的接触に支障の無い子どもだった。ところが今や突如として、まったく別の、内気で、孤立した、明らかに障害を持つ少年、ひょっとすると早すぎるかもしれぬが、内向的で不安定な少年が姿を見せるのである。この誰にも感じ取れ、後になって際立つトラークルの本性の変化を、他の友人たち、例えばトラークルと11歳で初めて知り合ったフランツ・ブルックバウアーは、性的成熟の始まる時期へずらそうとする。ずっと以前からの、何か打ち解けぬ静観的態度（これにはブッシュベックも、しばしば嫌な思いをした）にもかかわらず、トラークルは、以前は《人の気持ちを明るくする少年で、人に気に入られ、進んでいろんな悪ふざけをしたものだった。》さらにギムナジウム時代のトラークルの二人の仲間、カール・ミンニヒとフランツ・グリムは同様に、この重要な心的変化を、思春期に限定される現象、だから実際には、トラークルがすでに詩作をしていたとき初めて現れる現象だと語っている。これに反して、ブッシュベックの言葉から明らかになるのは、トラークルにはある種の接触困難が、すでに幼年期の早い時期にあったということである。

家庭女教師については何度か言及したし、ブッシュベックの思い出にも姿を見せる。彼女はマリー・ボーリングという名前の、生粋のアルザス女性で、トラークル家の子どものたちの生活では、母親代わりとしてとりわけ重要な役割を演じた。家族に雇われたのは1890年だったようだ。二年間の中断を入れると、トラークル家で14年間働いた。子どもたちが半ば成長し、ゲオルクの姉や妹が寄宿学校へはいると、自分の使命は済んだと考えたのである。

マリー・ボーリングは賢明な人物、エネルギーで非常に信仰心の篤い人物として記述される。信仰に凝り固まった、ほとんど狂信的ともいえる旧教徒だった。《異端の》家庭で働かねばならぬということで、絶えず良心の痛みを覚えていた。この葛藤は、彼

女の聴罪司祭によって、見受けるところでは実際偏狭極まりないフランチェスコ修道士によって、さらに激しく煽り立てられた。彼女に保護されている者たちを真の信仰に引き入れるか、あるいは罪深い仕事をやめるのか、この男は再三再四迫った。前者は見込みがなかった。そこで《マドゥモワゼル》は長く激しい心の葛藤の後、盲目的に愛していたかわいい異端者たちを見捨てる決心に達した。しかし故郷でそれに耐えるには、二年とはかからなかった。後悔の念に駆られ、ザルツブルクの仕事場へ引き返し、家族からは非常に喜ばれたにもかかわらず、良心の呵責が新たに始まったのである。（その間、トビアス・トラークルはジャンヌ・セイヤールという名のパリ女性を雇っていたが、こうなると、昔住んでいた《マドゥモワゼル》に再び道を譲らねばならなかった。）ボーリング嬢は燃えるような、外に厳しい愛情で子どもたちを教育した。カトリックの精神に則って、繰り返し被保護者たちに影響を及ぼしたことを度外視すれば（このことは種々の紛糾事を引き起こした）、フランス的教育法の古典的法則を（ほぼルップランス・ドゥ・ボオモン夫人の精神に基づく）遵奉していたように見える。彼女は子どもたちと、前述の青年ジャーナルや《子どもマガジン》の道徳を説く記事について語り合った。子どもたちに立派なフランス語を教え、自分が理解していたフランス文学に対する子どもたちの関心を目覚めさせたのである。

トラークル家の子どもたちは、お互いの間ではほぼフランス語だけを使用し、家では、両親と使用人とだけドイツ語で話をしたことを聞くと、驚かされる。そしてさらに思いがけないことだが、ここに、フランスの詩に対するゲオルクの関心の源が見つけられるのである。それというのも、上述の事に基づけば、すでにギムナージウム下級生の頃、また新進の抒情詩人として、《悪の華》や特定のサンボリストたちを――かなりの数の重苦しく誇張的な詩節、早い時期の抒情詩的試みに見られる少なからぬ異国趣味、これらはユイスマン、ロティ、メーテルリンク、ルイ、ローデンバッハ、レルベルグなどの著作の知識を前提とするだろう――原典で読んでいたことを恐らく仮定しても良からう。ほとんど目につかぬ程のある種のフランス風言い回し、というかむしろそういったものの余韻も、詩人がこの模倣をドイツ語の手本を基礎にしたのではなく、直接フランス語から汲み取ったという推測を抱かせるのである。成熟期の抒情詩に影響を及ぼしたアルチュール・ランボーを、トラークルが初めて知ったのは、1907年インゼル書店から出版されたアンマーの翻訳によるのは、ほぼ確かなことであろう。

ゲオルクはボーリング嬢の本性に、心深い母親らしさを感じたばかりではない、そのイニシヤティヴによって、彼の想像力はあらゆる領域で呼び覚まされた。ゲオルクの興味を、彼女は外国の切手に向けさせた（ヴィルヘルムの手紙も、遠方から舞い込んで来た）。すると実際、夢中になって切手を集めたのである。ゲオルクは《そのうえ中国人の林 陳氏と文通さえしていました。彼らはヴォラピュークで手紙を書いていました》と、フリッツ・トラークルは報告している。

器用にフランス語を話したばかりでなく、切手収集家との手紙のやり取りに人工世界語さえ覚えたゲオルク・トラークルという人間――このことは新たな尺度、新たな眺望を生み出す。憂鬱的、変人的本性を根底とするにもかかわらず、目的を追求し、多様な関心を持ち、世間的なあらゆる事に関係し、恐らく器用とさえいえる若者として、彼を示す観点である。世間の子トラークル！この可能性は、本当の母親とも言えるボーリングの手によって、どうにか道が開かれたものの、みずから選び取った罪に巻き込まれることによって、悲劇的な様相を呈し、無に帰せられた。このような《明るい》試み、いやそれどころか孤独の宿命から逃れようとする努力は、徐々に、しかし事によると他方では突然、〈血の罪〉と〈黒い毒〉の深淵に、あたかも呑込まれたかの様な外観を見せている。この早期の生の段階の積極性は、晩年の病的消極性と、極端に対立している。

幼年時代を通じ、母親的導きの星であったマリー・ボーリングを、トラークルがその抒情詩的幻像の全体的効果として取り込むことがなかったのは、奇妙なことである。彼女はそれにはふさわしくないと見なされたのか？トラークルは彼女を忘れていたのか、彼女の思い出は死に絶えていたのか？トラークルの詩作を生活報告として、厳密な意味

での年代的告白、ましてや論理的告白として解釈できるなら、そのような問いは心底正しいかもしれぬ。かなり深い（分析的）見方をすれば、もちろん彼の詩作は、生活報告で同時に告解だが、しかし報告や告解は本来ただ氏族に、血縁者にのみ関係するのである。トラークルは意識的にしろ、あるいは無意識的にしろ、血的な結び付きに――それは彼の場合、種、種族、劫罰との結び付きだった――法外な、途方もない、何れにしても反キリスト教的な意味を与えていたように見える。同伴者たちは、作品では不明瞭な痕跡を残したにすぎず、漠然と彼らの影が折に触れて集められる。献辞、あるいは四行詩『カール・クラウス』を度外視すれば、友人の誰一人として――ひとつだけ例外があるが――直接呼びかけられる人物にはなっていない。この例外は、トラークルが兄のように考えていた、カール・ボローメウス・ハインリッヒである。[K・B・ハインリッヒは元《ジンプリツィスムス》の編集長、後ミュンヘンのアルベルト・ランゲン出版社の原稿審査係。フィッカーのミュラウ・サークルに所属し《ブレンナー》の主な協力者の一人。宗教的色彩の《カール・アーゼンコーファー》《逃走と隠れ家》《神の恩寵を受けた人々》《隠棲からの手紙》等といった小説、物語、エッセイの著者。最後には修道院に入り、1938年カントン・シュヴィーツのアインジューデルンにあるベネディクト会修道士のモナステリウム・エレミタールムの助修士として死去した。]トラークルは『没落』と『別れを告げた者の歌』で、彼をはっきり〈兄〉と話しかけている。カスパール・ハウザーとノヴァーリスは、トラークル自我の揶揄に属する。彼らは自我幻像なのである。だから不思議なほど静かな気高い詩『ノヴァーリスに』は、彼自身（アド・セ・イプスム）への予言的墓碑銘なのである。そして娼婦の形姿は、伝説的（アーフラ）あるいは文学的（ソーニャ）人物だし、グレートル自我の妹的変態化であるのかもしれない。まるで彼の詩作品の人物は、同時に父の家の人物であるかのように思える。

幼時の日々は過ぎ去った。トラークル家の子供たちは、休暇の時だけは、お互いでんでんばらばらになった。そして夏休みの徒歩旅行や田舎滞在の折の村々や停車場は、ゲオルクの記憶にいつまでも残った。ときおり太陽のごとくぱっと輝くにもかかわらず、それらは断じて明るい避暑地体験ではない。少年はここで既に自分が摩・不思議な抵抗力に包まれ、憂愁、喪失感、自己疎外感に圧倒されるのを感じる――〈暗い村々を過ぎゆく私は影法師 憎しみと苦さを村々の泉から飲んだ〉と、詩『深き淵より』の第一草稿で言われている――これは後に、抒情的後継者で、オーストリアのトラークル賞受賞者ヴィルヘルム・スツァボォが、その詩集でさらに力強い言葉を使用しながら、模倣したものである。しかしトラークルによって初めて、悪意ある村、魔神的村、またその住民たちの度しがたい排他性に対する視点が開かれたのである。

たいてい夏の間もずっと、彼らは美しい親しめる庭のある街中に留まった。そして音楽の稽古は、可能な限り、休日も中断されることはなかったようだ。つまり六人の子供たちは、成果はさまざまだったが、みんなピアノを習っていた。両親みずから楽器を奏することはなかったものの、音楽教育には多大の信頼を寄せており、特に母親は、規則的に子供たちの練習と演奏に聞き入った。彼らはモーツァルト記念館コンサートに出かけたし、街劇場に、姉妹は予約座席を持ち、《私たち男の兄弟は、立見席へいったものです》（フリッツ・トラークル）。文学的なものに対する関心は《正常》で、だから型にはまったものを越えることはなかった。

ゲオルクは成人すると、しばしばピアノ演奏に多くの時間を費やしたといわれている。水準以上の腕前にまでこぎつけたのかどうか――《とにかくピアノを弾くのがとても上手だった》（F・トラークル）――権限ある方面からの意見がないので、保留するとしよう。すでに小学生の時からピアノのレッスンを受けており、後には年長の友人、作曲家アウグスト・ブルネッティ・ピサノが（ハウプトマンの《沈鐘》の前奏曲が、すでに彼によって作曲されていた）レッスンを見たのである。また家族の偉大な音楽的才能グレートルを励まし、作曲をさせたのが、このブルネッティだった。グレートルは成人すると、ヴィーンのポール・ドゥ・コンヌとベルリンのエルンスト・フォン・ドーナニイのもとでコンサートピアニストを目指し修業したが、最後の奏楽壇証書を得るには

至らなかった。

トラークルはロマン派音楽を偏愛しており、《モーツァルトに熱中することは決してなかった》と、フリッツは報告している。トラークルは思春期、ひよっとすると文学上の模範ボードレールに刺激されてか、リヒャルト・ヴァーグナーに熱中したが、すでに以前ショパンやリストを弾くことに夢中になっていた。このことは、ともかく相当な技術を推測させるのである。グレートルはこの偏愛を分かちあった。これは彼女がとりわけ、ショパンとロマン派ロシア人を完全に演奏したということである。何れにせよ、子供たちの中で最年少の彼女は、ゲオルクと他のみんなにたちまち追いつき、間もなく《やすやすと》追い越した。ガイペル夫人の回想によると、このことはグレートルの野心的でお気に入りの兄を、嫉妬ではなく感嘆でみたした。そして特にグレーテは、ゲオルクの心的世界で間もなく著しい例外的位置を占め始めたのである。二人の他の姉に対しては、しばしば無作法きわまる反抗的態度を取っていたが（察するに、年上だったからであろう）、グレーテにはすでに早くから控え目な好意を寄せていた。それは事が起こると、明らかにいつも妹の味方になったことから窺われるのである。

練習学校でのトラークルの進歩は満足すべきものだったらしいが、成績証明書は保存されていない。1897年の秋、同じく大学広場一番地にある八学年制国立ギムナージウム入学試験に合格した。いわゆる人文型の中等学校だった。ドイツ語や古典語の授業が中心で、それに対し《实际的》課目は、数学を例外として、はるか隅にやられていた。

ギムナージウムの最初の三年間は、知られる限り、静かに過ぎた。トラークルは始めから古典語に反感を示し、ドイツ語の授業を《特別好むこともなかった》（まだ生存している級友の報告）けれども。三年目ギリシャ語の授業が始まると、すべての成績が極度に悪化し、どの落第生にも許されていた進級試験にもかかわらず、四年生を繰り返さねばならなくなった（1901 / 02）。当時ゲオルクは、家での恥はともかく、言葉の真の意味でおのれを零落したと感じていたように見える。というのもその時から、学校に関するすべてに対して、おそらくは演技にすぎぬだろうが、完全な無関心と冷笑的とも言えるかたくなな態度で反応したのである。あの早い時期には、ヴェデキントが《春の目覚め》で滑稽的・表現主義的に戯画化したような、ゲオルクや親しい友人たちの心の姿や態度が、全般的にくっきりと目立っている。《トラークルはまさしく、私たちが無関心人間と呼んでいた奴でした》と、同級生フランツ・グリムは回想している。フランツは（ゲオルクが繰り返した）四年生で級友になり、狭い通路をはさむだけの隣の席に、数年間、机を並べたのである。

トラークルはすでにギムナージウム下級生の頃から、とかくボヘミアンの印象を与えていたと言われる。《彼がだらしない服装をしていたことはありません》と、グリムは述べている。《彼には何か特別なものが身につけていました——私たちとは違っていました。歩くときも、たいてい意気消沈したように前かがみになっていて、眼差しは物思いに沈み、悩んでいるみたいでした。探るような、あるいは放心したような眼付きのことも時にはありました。普通は、腰掛けに彫像みたいに身動きもせず座って、思いを巡らしていました。鼻孔を膨らまし、鼻を手で支えながら。それはまったく彼特有の態度でした。》グリムや他の者たちは、トラークルが根は陽気で、人付き合いの良い、誠実で仲間思いの若者だったし、クラスのどんないたずらも反対せず、一緒になってしたことを強調している。《学校では誰一人、彼がまったく真面目だと考えている者はいませんでした——いつも彼の表情には、静かな、頑固そうな嘲笑が浮かんでいました。》

教授たち以上に、同級生だけがトラークルの《特異さ》を認めていたように見える。彼は早熟として記述されるが、この早熟は振舞いとか知的態度から知れるもので、肉体的諸特徴から知れるものではないといえる。グリムはそのことをこう表現している。《世間への態度、精神的発育の点で、トラークルは同年者を凌いでいました。この事は各方面から尊敬されてもいました。彼は私たちの誰よりもずっと生き生きしていましたが、はるかに優れていました。》

この優れている点が、種々の課目における進歩と――弱点はラテン語、ギリシャ語それに数学だった（ドイツ語の成績は辛うじて可だった）――一致しないことを、恐らく教師連中だけははっきり知っていた。トラークルの仲間たちは、多かれ少なかれ、よい点を目標にみずから努力しなければならず、順調に事を処理していた。紛れもなく平均的で、小事にこだわる教授連中は、試作しているという噂の、強情な、抜け目ない印象の若者を扱いかねていた。無関心、あるいは天性のものではないと解される冷静な落ち着きに対して、抗しようがなかった。このころからトラークルは――兄弟姉妹にも――頭の変な奴と見なされた。そこで彼と関係ある何か人目を引く事件が起きると、独特の決まり文句が、学校で言い触らされたのである。《あいつなら出来ただろうさ――あいつがやったのなら良くわかる。》

トラークルはギムナージウムを不必要な悪、級友を否応なく（ノーレンス・ヴォーレンス）耐えねばならぬ悪の付随現象と見なしていたように思われる。心情を吐露した詩を読み聞かせることで、彼は級友の誰かを特別扱いした。例えばグリムである。ずっと以前から、トラークルの気持ちは、学校の知識や進歩とはまったく別の方向に向けられていた。そんなことには怠惰だった。怠惰であるばかりでなく、無感覚だった。教科書にはうんざりさせられた。というのも、ボードレールの刺激的な詩句が耳に残っていたからである。実際、彼が自分の悩み、考え、心配を打ち明けたのは、同じ年生まれの偶然によって、同じ学校のガレー船に鎖でつながれていた級友ではなく、数人の親密な友人だった。これらの友人は、物の見方が――田舎の俗物を、彼らは《身のほど知らず》と呼んでいた――自分と同じだと、トラークルは感じていた。それはエアハルト・ブッシュベック、カール・ミンニヒ、グスタフ・シュヴァープ、フランツ・ブルックバウアー、K・フォン・カルマール、アドルフ・シュミット、アントン・モーリッツ達だった。そしてこの中のかなりの者が、詩人の短い一生に付き添ったのである。

トラークルが《非常に早くから総力を傾注し》ドストイェフスキーを読み始め、《まもなく全てを知り尽くした》ことは、ブッシュベックから聞いた。ブッシュベックは当時よく、トラークルと散歩したと語っている。《私たちのする会話は、常に、私たちの内部にできあがっているものの、もちろん両者それぞれに甚だしく異なる世界像の一問題にかかわっていました。》トラークル、ブッシュベック、それにギムナージウムの他の二人の仲間は（カルマールも入っていた）、お互い《無数の文学的質疑や議論でいっそう親しく》なった。そしてまさしくこの関連で、ブッシュベックはあの《しばしばドストイェフスキーに関する燃え立つような会話》を思いだしている。ドストイェフスキーの宗教的で神秘的・民族的色彩の強い、革命的な反市民性は、トラークルに消しがたい印象を与えたに違いない。同じように《総力を傾注し》、同時期かあるいはもっと早く、ニーチェを読んだようである。

ドストイェフスキー崇拝、特にニーチェ崇拝が、ザルツブルクの友人の文学サークルで数年続いたようだ。シュネーディツはかなり後のエピソードを報告しているが、それによると、トラークルはザルツブルク詩人会《アポロ》（のち《ミネルヴァ》）で、讚美歌を歌うように感激の面もちで詩の数節を朗読し、気に入るかどうかわからない。皆に拒絶されると、若い仲間に向かって軽蔑を込め、《これはニーチェのものだ！》という言葉で浴びせ、こう述べると挨拶もせずその場を立ち去ったのである。

学校では《トラークル》は次第に《変わり者》の同義語になった。そしてこの変わり者の態度は、五年生になると目に見えて破滅的な姿を取ったのである。トラークルが教師や教師の骨折りに対し、ますます無関心に、ますますよそよそしくなるのに応じて、教師たちは彼に一層の敵意を抱くようになった。時折り教室の外にまで知れ渡るような、ちょっとしたスキャンダルが生じた。ギリシャ語の宿題で、デモステネスのアテネ人への演説を、ドイツ語の翻訳からギリシャ語へ反訳せねばならなかった時の事である――純粹の暗記練習だった。トラークルはその挨拶の言葉の単に最初と最後の行をノートに書き、この厚かましくも立派な業績に対し、《ガンツ・ウンゲニューゲント》つまり

落第点をもらったのである。(滅多に与えられぬ評点だった。というのも普通の分類形式は、フォアチュークリッヒ「秀」、ローベンスヴェルト「優」、ベュフリーディゲント「良」、ゲニューゲント「可」、カウムゲニューゲント「不可」、ニヒトゲニューゲント「不可の中」、ウンゲニューゲント「不可の下」だったから。)

グリムは『僧』という表題のトラークルの詩をはっきり記憶しているが、この詩は、地方新聞の抒情詩欄に掲載され、保存されているものとは完全に異なっていた。グリムによると、それは激情的な形象と表現に満ちており、冒険的だが、しかしそれだけ一層心を打つ言葉で書かれていた。これらの詩行は、1909年トラークルとブッシュベックによって第一詩作品集に採用された13行詩『聖者』と一致することが一多分『聖者』の前形式が問題になっていたのであろう一別の友人の言葉から明らかになる。即ちフランツ・ブルックバウアーが同様にこれらの詩行を記憶しているのである。トラークルはこの詩を、衝撃的な得意芸として、何度となく読み聞かせていたようだ。それもずっと後、詩人が七年生だった時か、あるいはギムナージウムを前にもうやめていた時にも。ブルックバウアーは次のように書いている。《トラークルと、文学に興味ある多くの若い人たちが、1904年から06年まで文学サークルを作っていた。月に一度リンツァー通りのベルガー・ブロイに集まり、皆が自分の創作を朗読した。参加者七名のうち、トラークルは最もおそるべき、最も風変りな参加者だった。あのころトラークルは主に散文を、もちろんとても洗練されたものを書いていた。元々は短編だった数編の物語中に、まったく奇妙な語り口の一人の男がいた。これらの中で特に私の記憶にあるのは、『追放者』、『おやつのパン』、『兄弟たち』それに『ひとつの過ち』だ。原稿も、手書きの新聞「文学的試み」のコピーも、失われてしまって取り返しようもない。『僧』という詩もしかり。トラークルの名前を聞けば、間違いなく耳を傾けたものだが、私はこの詩でトラークルを尊敬するようになった。欲情と禁欲が問題にされ、少々重苦しい題材だったが、出来ばえはすぐれていた。終わりは〈私の願いを聞いてください、おおマリア様〉だった。》(ブルックバウアー言及の手稿は、第二次大戦中、爆撃の犠牲になった。)

記憶にとどめられていた、終わりがラテン語の美辞麗句を見れば、我々の目の前にあるのは、同一の詩『聖者』であるのは疑いない。この詩は、1909年に計画されたものの、当時まだ刊行されるに至らなかった早期の詩篇に含まれている。この詩選集は(トラークルがこれを一その二つの戯曲までも一後になって棄却したのは当然だが)1939年エアハルト・ブッシュベックによって『金の聖杯から』(青春詩作品)という表題で出版され、これまで三度新版を重ねている。

聖者

みずから作り上げた苦悩地獄
恐ろしくも淫らな幻像に悩まされ
一これほど肉欲に魅惑されたことがあるか
彼の心が疲れはてるほど　こんなにも神に苦しめられた
心があるか一彼は弱り果てた両手をあげる
救いのない手を　天に向かって祈りながら。
だが胸に残るは苦しみに満ち　静まることなき欲望のみ
激しく熱に浮かされた祈り　燃えさかる祈りは
流れゆく　神秘の無限を。
すると陶酔もなく響きわたる
ディオニゾスの歓呼の叫び　まるで死にも似た
怒りに激する法悦に満ちて
何に強いられるのか　彼の苦痛の叫び　願いをお聞きください　マリアさま!

《悪の華》やできうる限りの思春期の読書からえられた開花。[事実この早期の詩にはすでにボードレールの影響が指摘されている。クラウス・キンダーマンはその国家試

験論文《ボードレーとトラークル》(ベルリン 1959年)で上の詩を詳細に扱い、ボードレーの詩『ある異教徒の祈り』と対比させた。] アンジャンブマン(詩行から次の詩行へのまたがり)はフランス語の模範を暗示しているし、誤解された悪霊崇拜もしかり。病的で退廃的な重苦しい雰囲気は、当時ちょうど花盛りだった新ロマン主義の産物だろうか? 力強い調子はデーメルそのままだ。この詩は診断の手がかりとして興味なくもないが、ひよっとするとフェリックス・デルマン(当時ヴィーン社交界の流行デカダン主義者)の《神経症》の寝室のある種の眺めかもしれない。もしこれほど救いようのない素人じみたものでなければ。デルマンとの関連でみれば、そういったことも好感を抱けることではあるものの。不自然なエロチシズムと敬・の融合は、俗悪でそのうえ滑稽な印象さえ与える――不本意なひとつの戯詩。プロテスタントにとって、カトリック的主題と《願いをお聞きください!》という聖母への呼びかけは奇妙極まりない。

同じくギムナージウムと実習生時代の詩人の親友アドルフ・シュミットは、トラークルが当時《印象主義的な》詩を作っていたと語っている。トラークルがシュミットに読んで聞かせた多くの詩の中で、特別深い印象を残したのは叙情的小品だった。《彼がその詩で描いていたきらめき輝く陽光は、ヴェランダガラスにからみつく葡萄蔓の隙間から忍び入る陽光だった。市松模様のテーブルクロスやガラス戸に写る葡萄蔓、それらを金色に染める日の光の戯れが、今でもまだ目に見える思いです。》トラークルの詩作は同年令の者たちを魅了し、早い時期から呪われた詩人の評判をえたことが見て取れるのである。

ギムナージウムも終わりに近づく時期は――七年生の終わりにゲオルクはまたも進級できず、退学を命ぜられたようだ――クロロホルムで気を紛らせる恐らく最初の試みの時期でもある。トラークル文献の中ではここかしこで、ゲオルクが年配のザルツブルクの薬剤師の感化を受け、この薬剤師が麻薬に誘惑したと推測されているが、それは当たっていない。信頼できる我々の情報によると、それはほぼ同年令のある著名な、やはり薬剤師の息子だった。彼はトラークルに初めて麻酔薬を世話したし、自分自身それを試していたのである。恐らく初めのうちは、トラークルは麻薬を真に欲した訳ではなかったろう。その気になった要因は、好奇心や何かタブー視されていること、危険なことを行う欲望だったろう。田舎に対する、俗物に対する、父の家に対する反乱か? ひよっとすると。あるいは文学的な模倣、今回は宿命的な模倣を、またも我々は信じるべきなのか? 彼は《人工楽園》というボードレーの夢を追おうとしたのか? 《今世紀の比較されぬ言い回し》で語る巨匠の技術を、そのような方法で習得するために? [もしかすると、トラークルは《悪の華》の最初の序文と二度目の序文を知っていたのかもしれない。ボードレーは1860年それらをただひとつの序に縮小した(1887年まで未刊に留まったが)。我々はその終章を引用したのである。《私には私の神経とむら気がある。私は完全な静寂と途切れることのない夜を望む。葡萄酒と阿片という気違いじみた快楽を歌う詩人として、私はこの地上ではいまだ知られぬ果汁だけを渴望している。天国の薬剤技術でさえ作り出せない果汁を。生命力も死も、あるいは刺激も無をも含まぬ果汁を。何も知らず、何も教えず、何も欲せず、何も感じないこと――眠ること常に眠ること、これが今日の私の唯一の望みである。破廉地な、吐き気のするような、だが実直な願い……》] しかし恐らくここにはすでに罪の感情、逃げ道のなさ、おのれに向けられた無化衝動といったものの最初の痕跡が見いだされるであろう。

ガイペル夫人には60年後の今日なお、ゲオルクがソファの上に体を伸ばし、深い麻酔状態で発見されたとき、家中が襲われたどうしようもない驚きの印象が残っている。これはそのころ家の中で生じていた何か不気味なもの、説明不可能なものとの家族の最初の対決だった。《すべてを青く眺めた》、毒にも薬にもならない《妄想家》は一人前の中毒者になっていた。そしてこれ以後、麻薬中毒という青白い爬行動物は、もはや彼の踵を離れることはないであろう。

いつか他のとき(そして後には何度か)、詩人会《アポロ》の友人たちが、戸外で眠りに落ちているトラークルを発見したことがあった――冬のカプチナーベルクで半ば凍っていたのである。死のような深い麻酔から再び正気に戻されると、当惑や絶望

間はまったく見えず、シュネーディツによれば、リンツァー通りの詩人仲間の居酒屋へ連れていってもらいたがり、そこで《一杯の葡萄酒をゆっくり味わうように飲むと》たちまち快復したといわれている。しかし麻酔薬を繰り返す間隔が段々短くなり、もはや呪うべき欲求にまでなると、その後の精神的な気分は、絶望的でひどく後悔じみたものだった。この種の衝撃的記録は、カルマール宛のイェルク・トラークルの署名を持つ日付けなしの書簡である。トラークル・研究は、それを今までのところ最も早い時期の手紙だとみている（ハンス・スツクレナール《・・・それでもやはりすでに見間違ふことのない詩人の諸特徴を帯びている》）。〈休暇の始まりは僕にとってとても具合が悪かった、それ以外にはありえないのだが。一週間前から僕は病気だ――絶望的な気分がして。始めのうちはよく、そうすごく勉強した。そのあと神経の疲れをとろうと、残念ながらまたもクロロホルムへ逃げ込んだ。効き目はすごかった。この一週間僕はそれに苦しんでいる――神経はずたずただ。しかしその方法でまたも自分を宥める誘惑に抗している（駆られている）、というのも破局が余りに近いのが見えるから。〉さらに続く内容から、友人が彼をヴィーンに招いていたことが明らかになる。〈僕は休暇が始まるとすぐ、ガストアインとその周辺へ五日間のハイキングをした。そこは何もかも値段がひどく高かった――シーズンの真っ最中でもあったから・・・というのも父にそんな出費を頼みたくないから・・・〉休暇の言及、ラテン字体――成熟期トラークルは草書体を用いた――、また父親への金銭的な依存の指摘などから、これらの文章は、ギムナージウム在籍最後の夏（1905年8月）に書かれたと結論できる。〈始めのうちはよく、そうすごく勉強した〉という文章は、進級試験のための休暇中のガリ勉と関係しよう。もちろんトラークルは七年生を落第した後、この救済可能な試験をもはや受験せず、1905年9月26日ギムナージウムを退学させられた。彼がこの手紙を書いたとき、いずれにせよまだほんの18歳にすぎず（・・・残念ながらまたもクロロホルムへ・・・）すでに麻酔薬の経験があったのである！

破局や死に対する不安は決して脳裏を去ることはなかったにもかかわらず、彼は友人たちにクロロホルム癖を自慢し、エーテルに陶酔して死ぬのはすばらしいに違いないと、いちど会話の中で述べたこともあったと言われている。そのころ彼は自殺を効果的な話の飾りとして、なんと軽々しく口にしたことだろう。本気で自殺を試みることもなく。こういった脅迫の動機は、しばしば滑稽なものだった。そこでブルックバウアーの報告によると、いつも甘さを身にまとっていたトラークルは、お菓子やさんたちがもはや彼の言うことを信用しようとしなかったので、《拳銃で自殺する》と脅していたのである。

強制的な中等学校中退によって、彼は第二のさらに厭わしい零落感に見舞われた。ひとつの弱みだったが、この上なく感情繊細な若者は、外部に対しては冷静な落ち着いた態度をとることで、それを無視したのである。数学、ラテン語、ギリシャ語という厭でたまらぬ主要科目の成績不良が、退学理由だった。それはともかくとして、学校の名誉回復のために言っておけば、少なくともドイツ語教授が一人だけ、七年生であったトラークルの独自の文体を指摘し、この若者の噂をそのうち耳にすることになろうと述べたそうである。

当時は、中等学校六年終了で、トラークルとその家族が社会的に我慢できる職業につくための準備としては十分だった。つまり薬剤師である。それ以外には一年志願兵として兵役を務めあげることができた。（官吏になれという要求を、彼はそっけなくしりぞけたと言われている。）薬剤師の人生航路にトラークルは関心があった――イプセンも薬剤師ではなかったか？免許状を手に入れるには、徒弟として薬局で三年間の実習と、大学における四学期の証明書が必要だった。この不吉な職業選択に深く取り乱した父親は、はじめ抵抗を示したが、最後には反対するのに疲れはて、トラークルは1905年9月18日、リンツァー通り七番地の《白天使》薬局に見習いとして入った。カプチナーベルクの山腹の下にある静かな非常に古い薬局で、ゼバスチャン墓地から遠くはなかった。《その所有者は》、ブッシュベックが回想したように、《年老いたアル中だと評判の男で、70歳にもなっていて、学生会議があるとまだ学友会帽子をかぶって出かけていた。そこで徒弟として働いていたにもかかわらず、トラークルの以前の級友たちの中に

は、今や彼を見下すものもいた。これは神経過敏なトラークルを深く傷つけた。私たちは前と同じように接触を続けていた。私もやはりそのような〈アウトサイダー〉だった。同じ年彼のように落第し、今や私立学校の生徒として学期末の試験を受けていたのである。》

この天使薬局の所有者、マギスターのカール・ヒンターフーバーは奇人だったし、彼の辛辣な言葉は町中に広まっていた。トラークルについてこう述べたといわれている。すばらしい詩人かどうかは決めかねるが、薬剤師としてはまったく駄目だったと。この意見が確かなものであれ不確かなものであれ、いずれにしても正しくない。今日、人の知るところでは、厭わしかったギムナージウム時代とは反対に、トラークルは薬局では真面目で有能だったし、熱心にまた誠実この上なく自分の勤めを果たしたのである。

学校の束縛から解放され、トラークルは――仕事の外で――今やいっそう意識的にひとつの生活様式に身を委ねたが、その無軌道さと馬鹿さ加減には驚かされる。天使薬局の地下蔵で、数はたいして多くはないものの、危険極まりない麻薬に至るまで、当時のすべての麻酔剤や興奮剤を、彼は自由に使用できたのである。カトリック大司教区ザルツブルクの街には、硬直した階級的排他心、偏見、偽善があったし、女たちが群がり、そのうえ社会的にも優遇されている将校がいた。これらのことが、ブルジョワを仰天させるような極度に過激なことを実行する際、力強い推進力たりえるのかもしれない。人々は革命的決まり文句を楽しんだばかりでなく、可能ならいつも俗物を馬鹿にし、これ見よがしにあの《娯楽施設》を訪れた――当時ザルツブルクにはそれが二軒あった――こういう場所を、市民たちの明暗ある性道徳は喜んで認めるのである。このような一般的娯家訪問には、疑いもなく文学的刺戟が関わりあっていた。ドストイェフスキー崇拜の主要な時期で、娯家たちは卑しい者、侮辱を受ける者に属していた。芸術家サークル内では、赤い《炬火》小冊子が手から手へ回されていたであろう。その中でカール・クラウスは性的革命の旗を掲げていたし、精神の侮蔑と肉体の神々しさという真に黙示録的頌歌が出現していた。トラークルの学校友達（グリムとブライティンガー）は、詩人がすでにギムナージウム上級生の時、大胆にも規則的に娯家を訪ねてさえいたと主張している。否それどころか、彼はシュタイン通りとユダヤ人通りの《常連》だったと言われている。論旨退学を求める極端な挑発！またトラークルはすでに中等学校の時、遠慮も見せず堂々とよく煙草を吸っていた。これはあのころ侮辱とみなされ、学校から懲罰されたのである。グリムの回想では、トラークルの上唇の生えていた黒い産毛は、絶え間ないニコチン摂取で黄色くなっていたし、指の爪も同様だった。グリムが一度詩人の《部屋》を訪ねたとき、煙草を差し出され、その強さと効き目を注意された。後に知られたところでは、トラークルにクロロホルムを世話したあの薬剤師の息子は、阿片溶液もつくっており、トラークルはこの溶液に煙草を浸していたのである。

詩人の伝記作者の意見が皆一致している点は、トラークルが成熟期に、その外面像にも不都合な影響を及ぼした根本的心理変化を体験したということである。シュネーディッツは正確な調査に基づき、突然《驚くべき中間休止》が現われ、彼の心情が暗闇で包まれたことを報告している。そして我々がブルックバウアーから知るところでは、《心的傾向が思春期とつじよとして根底から変化したし》、トラークルが《不機嫌で、喧嘩ばやく、尊大で、自惚れも強く、厭世的に》見えたのである。すでに学校時代の終わりが誇示されていた態度が、今や不合理なまでに強まり、同時に周囲の世界と接触しようという気持ちが段々弱まった。詩人らしさを外部へもはっきり見せようとして、髪をきれいに分け、ポマードをたっぷり塗り付け、芸術家を気取り、長髪を襟首までたらししていた。また高い折り襟を好み、背広はいつも最新の流行に合わせて仕立てねばならず、カフスが袖から大きくのぞいていた。ニコチンで黄色くなった産毛は、濃いブロンドのちよび髭になり、もみあげは下頬にまで達していた。当時のポートレート写真は、意識的に気取って前方を見つめるトラークルを示している。彼の立場とアウトサイダーたることにふさわしいと信じたこの外面的お洒落と尊大さは、内面の混沌に应じていた。凍結作用、限定欲求、軽蔑、自分自信の無効化として定義される混沌に。それには嘔吐感やありとあらゆる幻滅感が、おそらくは性愛の領域でも伴っていたであろう。すべての努力の無益たる感情や、人間的行動に内在する自己欺瞞の認識といったものと同じよう

に。この思春期と思春期後の欲求不満には、トラークルが数年を経て落ち込んだあの恐ろしい抑鬱状態にいたる萌芽のあることは疑いえない――それはゲオルクの一年兵志願の年の後で始まったと、弟は述べている。

トラークルは当時気のあったボヘミアンたちと交際していたが、その中でも彼は最も風変りで最も極端な一人だった。堅気な町の人々は、当時規則的に種々の公的な場所、カフェ・バザールやトマゼリィあるいは地下酒場に集まっていたこのサークルを、《頭のおかしな連中》と呼んでいた。その会の名は最初《アポロ》、のち《ミネルヴァ》と呼ばれた。会員とともに名称も変わったのである。何かに熱中していることが最初の入会条件らしかった。この詩人サークルのある若者は、宗教的諸理由から去勢さえしたが、シュペリィが正当にも述べているように、これはボヘミアンとして許される限界を明らかに逸脱している。

一人であるいは二人連れで（相手はブッシュベック、ブルックバウアーあるいはミンニツヒ）深夜まで遠くへ散歩し、ある時は黙想にふけり、ある時は論争に熱をあげていた。世界観の諸問題について、当時最新の文学について。いつも待ち焦がれていたヴィーンの新聞は、ホフマンスタール、ヴェデキント、シュニッツラーの戯曲が上演されると、興味をそそる批評を掲載した。《ゲオルクはとりわけイプセン、ビョルンソン、ストリンドベリのドラマが好きだった》（フリッツ・トラークル）。際限なく盲滅法に読んでいたのである。

いよいよ深く、トラークルは滅びの哲学へ迷い込んでいったが、この哲学は彼よりそれほど年長でないビュヒナーの《ダントンの死》における発言、人生はただ《錯綜した腐敗》にすぎないを思わせる。この滅びの哲学は、外部からはザルツァハの街のバロック芸術作品から、またこの街のミイラ化された精神から彼に放射してくる腐敗の栄光によって培われたのである。時には「薄闇の迫る公園をさまよいつつ」、ヘルブルン城公園に夜通し閉じ込めり、それから朝になると、夢に心を奪われながら天使薬局の仕事に姿を現わした。[このことに関してトラークル伝記作者フリードリッヒ・ヨハン・フィッシャーが述べている。薬局の薬剤室と並んで狭い部屋、一種の材料室がある... だからその奥の〈小部屋〉が、仕事の時トラークルの最も好んだ居所である。世間から遠く、人間からはなれて、また人間の問題から遠く。頭を手で支えながら、考えに閉じ込めり、完全に世間を忘れてトラークルは座っている。主人の薬剤師は根っからの善良な人間で、しばしばトラークルをそっとしておいてやる...。】詩節『ヘルブルンの三つの池』に彼は長い間磨きをかけていた。(1909年12月18日トラークルに宛てのブッシュベックの手紙を見よ。《『三つの池』の代わりに『12月のソナタ』という題を私はつけました。三つの池がない方がひょっとすると実際ずっとよいかもしれません。リズムを乱すものが何なのか本当のところはわかりませんが、おそらく余りにも多く、長年月をかけて彫琢されたからでしょう。》) この三枚絵の詩は、時間的にはなれたふたつの異稿として、我々に手渡されている。ここでは最初の原稿と後の稿の第一の池に関する詩節をおってみよう。そうすると印象主義的気分詩から、成熟期初期のバロック的表現主義への飛躍が見て取れるのである。

花のまわりをふらつくように飛び回る蠅の群れ
そうして陰鬱さをたたえた水面には青白い花
去り行けよ！去り行けよ！大気が燃えている！
深いところでは腐敗の熱が燃え立っている！
柳の枝が泣き、沈黙がじっと見つめる
水上には重苦しいもやが立ちこめる。
消えよ！消えよ！ここは黒いひきがえるどもの
吐き気を催す色情の地だ。

ぞっとする蠅の群れに取り巻かれながら
仮面が褐色の水面を滑って行く

小さな両手は白く死に絶える
そうして腐敗の熱で温まっている。
白樺の木がそっと身を震わせ続ける
そうしてねばつくようなもやの中に深く沈みこむ。
妖怪がここかしこで身を屈める
黒いひきがえるどもの荒々しい色情の上へ。

トラークルはミラベル公園も好きで、そこには小さな庭や、道に迷うほど鬱蒼と葉に覆われた小道や通路の迷宮があった——「牧神が死んだ目で見つめている／暗がりへ滑りゆく影たちを」。この抒情詩では、まだすべてが瞑想と音楽の中にあり、主題的気分浸され、透明さをもっている。滅びが到るところで詩人に歩み寄ってくる。「美しい街」は、彼の想像力の中で形のない黄ばんだ形象に砕けてしまう。「褐色に輝く教会から／詩の清らかな形象が見つめている」と、かなり後期の作品である、有名なザルツブルクの頌歌の中で言われている。

彼はアニフの方角へぶらつくのが好きだった。アニフとは——この名前はトラークルの語彙であるかもしれないが——ザルツァッハ近郊の村である。ほかのお気に入りの場所とか散歩道は、メンヒスベルクやカプチナーベルク、ペーター墓地、ノンベルクタールの奥まった所、ミュルン郊外、沼地へ向かうフライザール方角の通り、それにマリア・プラインへ通ずるザルツァッハウーフアーに沿った道だった。こんなことがあった。トラークルはある友人を道連れに、何時間も熱に浮かれたように話を続けていたが、手のひらを返す間もなく、また長いこと沈黙し、ついに疲れきった同行者が腹をたて別れを告げると、それが新たにトラークルを憤慨させたのである。この時期のトラークルの友人は皆、気力や気分の急激な変化を記述している。ディオニゾスの生喜びが、唐突に陰鬱きわまりない無口、あるいは不遜な沈黙と交代することがあった。猛々しい自殺の脅迫や、避けようのない早世についてのほのめかしが、生やエロスの賛美と著しい対照をなしていた。ある散歩の時、またも彼が自殺の意図を述べると、当の友人は《けどお願いだから、ぼくがそばにいるときはよしてくれ！》と、大きな声をあげた。この心情的に残酷な発言は、トラークルの骨身にこたえたと言われている。

三年間の薬剤師実習時代（1905--1908）、多くの分枝に漸次発展し、1909年の終わりに初めて整理され、およそ50の詩からなる選集の形で、友人エアハルト・ブッシュベックの前にあった前期の抒情詩は、トラークルの引き裂かれた心の状態を余りにも忠実に映し出す鏡である。そこには陶酔的な、両極的響きを持つ、過多ともいえる形象があふれている。これら詩作品の血で汚れた広野には、殺人者や好色漢が群がっているように見える。最初一瞥しただけで、ここには余りにも抑制され屈折しているが故に、過度の緊張を持つ想像力が、まだ独自の言葉を使いこなすには到っていない想像力があるのを認めることができる。ほとんど独自性に欠けるこの作品の芸術的価値は小さい。だからトラークルがこれを残していさえすれば、今日、彼の名前はザルツブルクの詩人仲間同様忘れ去られただろう。ところで興味あることだが、ここにはすでに形容詞や副詞的語彙のあの異常発達が姿を見せている。成熟期と後期詩作品にもそれは現われるが、ただその時期には、まさしく言語の全能力と色彩の神秘が伴うのである。そして過剰ともいえる言葉の形態が、いよいよ光り輝く高みにおける天使たちの合唱のように、今やまがうことなくトラークルのものたる一宇宙に秩序づけられるのである。すでに早い時期の詩が《色彩的》であることを暗示している。しかしそこでは色彩は、多かれ少なかれ、感覚的印象の強勢的意味を持つにすぎない。ザルツブルクの街を無比の色彩和音で伝えてはいるが。古いバラ色、石のような灰色、大理石のような蒼白、皇帝のような黄色、銅のような緑——蛾の色彩！月が湿った緑色の木陰の背後に登り、ジグムント広場の狭苦しい家々の漆喰が、素朴で童話的色彩に輝く様を、また洗馬場で淡い黄褐色の崖が、石灰のように真っ白くなるのを眺めたことのある者なら、トラークルが詩に作り上げたものは、もともと現実そのままの印象だったことを理解できるだろう。

ようやく次第次第に——厳密に言えば1910／11年からようやく——色彩が独自

の生命を獲得し、隠喩、語標、象徴になる。「赤い苦悩・・・象牙色の悲哀・・・紫の拷問・・・黒い歩み・・・バラ色のため息・・・月光の岩の中で・・・青い鐘・・・金色の喊声・・・銀色の臉・・・ヒアシンスのような夕暮れの顔・・・金属の死の音色・・・狂気の黒い瞬間から・・・月の中の雪白の火・・・青い眠りに埋もれた妖精・・・彼の顔は高貴と悲哀で黒ずんでいる・・・銀色の足底に・・・一匹の青い野獣・・・彼の金属のような両肩・・・夕暮れ疫病が彼女の青い衣服を縁どる・・・赤い恐れから・・・壊れた街に夜が黒い天幕をおろす・・・金色の日輪となって昼が音たてて去りゆく・・・褐色の灰汁の中で」などなど)。そこでヘルマン・シュライバーは、その素晴らしいトラークル・エッセー（《詩人と色彩》）で、きわめて深いものに出会い、こう書くのである。《トラークルは、言語形式が彼に強いるあの譲歩以外にはほとんど譲歩せず、魂の内面像を翻訳する。否それどころか、恥じらうことなく言語自体を補助として呼び寄せさえする。そして今やあらゆる対象的結合から自由になった色彩幻想を、形容詞によって明らかにする。この形容詞は、本来の色彩象徴では共鳴する事のないものを、強調しながら語るのである。形容詞から属音が生まれ、属音の方でも形容詞を必要とする・・・ここでは色彩は、その字面に応じて形容詞の中へ半音下げられているだけだが、実際には何かを説明するだけではない。色彩は概念をにない、この抽象名詞は意味だけをになっている。》詩人が絶えず使用した、かなり古い綴り「恐怖（グロイエル）」、あるいは「陰鬱な（グロイリッヒ）」すら、やはり灰色（グラウ）の色彩価を持っている。「そして恐怖に恐怖を積み重ねる時代」と、1909年6月の日付を持つ詩行『三つの夢』の中で言われている。本来次の詩は前期の詩作品だが、1910 / 11年後には、以前では想像もつかぬドイツ語の高原へ、いな最高地へいたる出発がこれに続くこととなる。

恐 怖

私は住まう人もない部屋を歩みゆくおのれの姿を眺めた。
――星たちが青い水の底で狂ったように踊っていた
そうして野原では犬どもがけたたましいうなり声をあげ
梢では南風が荒々しく吹きすさんでいた。

だが突如として静まり返り 息苦しいほどの高熱が
毒の花を私の口もとに咲かせる、
大きな枝からは まるで傷口からのように
微かにきらめく露が滴り落ちる 落ち続ける 血のように。

鏡という惑わしの虚無から
ゆっくりと浮かび出る 偶然であるかのように
戦慄と暗闇の中から カインの顔が！

戸口の天鵞絨のカーテンがかすかな衣擦れの音をたてる
月は窓から虚無をのぞき込んでいるのか
このとき部屋には刺客と私の二人だけだ。

『聖者』詩の場合と同じく、敬虔と激情の倒錯的混合が、これらの形象の多くに共通している。「そのとき もつれ合った人物たちの中から輝き出る／一人の女の姿 暗い悲しみのヴェールに包まれ／そうして呪わしい恐怖の聖杯を私の中へそそぎ込む」。これらの言葉は、ソネット『祈祷』の最終テルティネ節を成している。最初は「鐘の音、暮れゆく祭壇、パイプオルガン、静かな合掌」それに「久しく忘れられていた祈り」が語られているのである。血と激情の風変りな奇怪さは、ソネット『安息日』にもある（トラークルの《十四行詩》はまだかなりボードレール的だった）。ここに沸き立っているのは、まだまだ精神によって低く抑えられてはいるものの、ザルツブルク方言で言うところの、低俗で放縦的な《クッフルバロック》（キュッヒェンバロック）である。まさしくスペイン語のバロコ、つまりエクストラヴァガンテ（突飛な）、デ・マル・グスト（悪趣味の）が思い浮かぶのである。

安 息 日

毒々しく熱を放つ植物の気配と
ほのかな月光のなかで 私は夢を見る
そうして私に絡みつき 巻き付くものを微かに感じる
また狂った魔女たちの安息日にも似て

血の色に光る花が 明るい鏡のなかで
私の心臓から 炎のような熱情を搾り取るのが見える
またすべての芸術に通じる唇弁が
私の酔える喉元で荒々しく膨らむのが

熱帯の岸辺に咲くペスト色の花が
私の唇へ花殻を届け
忌まわしい苦悩をよだらす泉に暗影を投げかける。

そうして飲み下すのだ——おお猛り狂うメナード——
私の体は 一本の花を 重苦しい幻影に疲れ
恐ろしい熱情の痛みに恍惚となって。

これらの詩が成熟期の詩と著しく異なる点は、かなり後期のいわば神話的・無名的像へ確かに接近しているのが時には目立つものの、その装飾的、修辭的効果や、神秘にきらめく外観を考慮した思想性である。それも、私的領域を越える発語がほとんどどこにも見えぬ、強烈な自己中心的主題における思想性。〈究極の苦痛が胸に満ちるがいい／私はおまえたちに抗がいはしない 敵意ある暗い力よ・・・踊りを楽しみながら いま私は血を流している／そうして憂いを花で飾らなければならない／おまえの心は奥底でそれを望んでいるのだ おお夜よ・・・暗闇が黙しつつ私を消し去ってしまう／私は昼間の死んだ影だった——／そのとき私は喜びの家から歩み出て／夜のなかへと・・・〉

世紀末デカダンお好みの主題に捧げられた四節の詩『滅び』は、レックによって成熟期詩作品の冒頭に配置された同題のソネットと、雰囲気（それに漠然とだが鳥の形象）を共有するにすぎないが、すでに早くも例の影や幻像が告知されている。それは、消えることのない諸特徴を帯びて、後のトラークルの詩的空間にゆらゆらと絶えず姿を見せるのである。〈月が高い広間を満たすと／いかなる祝祭の音も もはや響きわたることはない〉と歌われるのは、若い詩人の現実の二行の詩であり、ザルツブルクの博物館的舞台からとられたものである。〈その部屋は腐敗に咽んでいる／鳥たちは黙したまま円をえがいて飛び回る〉。

ここには（恐怖譚詩の音色の）譚詩風のものや、疊句行を持つ素朴な歌謡風のものがある。そういったルフランについて、耳ざといブッシュベックが後にこう書いている（1909年12月18日の手紙）。《『女の祝福』のなかで、なにか私をかき乱すものは、〈暗い 暗いエーヴァ〉という疊句でした。それは最初の草稿にすでにあつたのでしょうか？ いずれにしろこの疊句は、今のところ気持ちよく感じられません。まったくこの詩は、耳にしたことがないくらい美しいのですから、ことにそう感じます。このルフランを三度聞くと、どの場合にも素晴らしいという感じから、平凡で空疎といった思いに引きずり込まれます。疊句は三つともすべて省くのが一番いいと思われまます。》（そうすればまた何かが生じたかもしれないが。）しかしこの前期の抒情詩、まだ全般的に自立していない抒情詩、レーナウ、ボードレール、ヴェルレーヌ、ゲオルゲ、ホフマンスタール、リルケそれに群小詩人たちを模倣している抒情詩のなかでさえ——ランボーの影響あるいはランボー翻訳者の影響は、まず第一に1909年の詩『死の教会』（アンマーのドイツ語訳《教会の貧者たち》に倣った）に感じられる——そこかしこで、驚嘆すべき形式の詩行に出会うし、それはすでに一人の詩人の詩行、おのれに、おのれの運命に、そ

れ故おのれ自身の表現世界にいたる道を見いだし、それに満足している詩人のものたる詩行なのである。〈私の苦痛のあまやかな花嫁のように／そして私の臉の酔えるけしのように・・・古い希望という星々の花環が／久しく神のいない祭壇でしおれていく・・・そしてあまやかに黄昏れる／試練を下されたごとく　その部屋は・・・〉

1905年早秋、トラークルは詩人会サークルで、劇作家で小説家のグスタフ・シュトライヒャー（1873--1915）と知り合った。イン川地域に住む正真正銘のザルツブルク人で、その自堕落な傾向と、際立つ反市民性によって、ふつうは人が近づかなかった。しかしまさしくこのことこそ、トラークルと彼の友人たちをこの中年男の影響圏へ引き入れた理由だった。シュトライヒャーは、精神的には《郷土芸術》・運動、つまり自然主義のオーストリア分派の出だった。彼の戯曲は（《キリスト降誕》《愛の犠牲》《シュテファン・ファディングー》《モナ・ヴィオランタ》などなど）年月という冥界のなかに沈んでいるが、イプセンやメーテルリンクに依存して成立したものである。だから自然主義と象徴主義の間を揺れ動いていたのであろう。トラークルは、現代の演劇文芸がザルツブルク市立劇場で上演される限りでは、それらについて知っていたし、読んでもいた。また仲間たちと解釈したりしていたのである。トラークルはシュトライヒャーと知り合ったことで（シュトライヒャーは、興味をそそる若き詩人に好意を示し、特別の文学的保護を与えた）、ドラマでも同じように自分を試してみたいという気になった。シュトライヒャーの知的世界（と更に模範とするイプセン）の完全な影響下に、一幕劇『死の日』が成立した。シュトライヒャーはこれを市立劇場に推薦の言葉を付して渡したが、劇場監督カール・アストナーとは親交を結んでいたのである。二番目の一幕物『蜃気楼』も、シュトライヒャーの仲介で劇場の手に入った。シュトライヒャーの推薦文が、しかしおそらくそれ以上に、若き作者が声望ある市民で実業家のトビアス・トラークルの息子であること、このことは大衆を引きつけるに違いないという考えが、アストナーにふたつの戯曲を引き受ける気を起こさせたのであろう。

『死の日』の上演は冒頭に配置され、満員の観客を集めて、1906年3月31日に行なわれた。アストナーはこの作品を、ザルツブルクの連隊付き軍医で、成功を博したチロルの小説家ハインリッヒ・フォン・シュレーレンの一幕劇（《ジレーネ》）と、ジャック・オッフエンバッハの小品（《ランタンの灯のもとでの結婚式》）の前に置いていた。観客の受け取りかたは好意的だったが、批評では分かれた。『死の日』と『蜃気楼』の内容は、当時の初演報告のおかげで復元されるにすぎない。作品はふたつとも保存されなかったからである――『蜃気楼』の不評によって、検閲見本さえ容赦しない、落胆した作者の宗教裁判の犠牲になったのである。批評もすべてトラークルは棄却した。

『死の日』では、盲目の青年が若くて澁刺としたグレーテ（！）という名の娘を情熱的に愛する。そして自分もまた同じ情熱で愛されていると思っている。しかし生に渴した少女グレーテは、学生フリッツとともに彼を欺く。そこでペーターは悲痛の余り発狂し、衆人の前で自殺する。二人の人物からなる『蜃気楼』の〈悲劇的場面〉の主題も、全体の細部では、こじつけあるいはなまかじりの感がする。すなわちこの戯曲は、支離滅裂な寓意的独白と対話によって、夜の荒れ野で道に迷った旅人の話を物語る。旅人は、自分の前に姿を見せるクレオパトラの幻影と、愛の一夜を過ごしていると思ひこむ。陶酔から目覚め幻想に気づくと、おのれの孤独に絶望し、高い岸壁から深淵へ身を投ずるのである。ふたつの戯曲で重要なのは、自殺の動機、すなわち愛の幻滅と自己幻滅である。前者は議論の余地なく嫉妬幻想である。

リベラルな《ザルツブルク大衆紙》（1906年4月2日号）は、全体として『死の日』を好意的に扱ったし、トラークルの言語の力と直感性を賞賛さえした。イプセンの《幽霊》との類似点があげられた。これに反し、宗教日刊紙《ザルツブルガー・クロニク》の批評は驚くべきものだった。初登場したトラークルのあらゆる才能を拒絶したばかりではなかった。依然として聖書を信じることができるのは純真な子供だけだと、作者が主人公に述べさせたことも、批評家を不愉快にさせたのである。二十歳にもならぬ詩人の戯曲は、青年の愚行としては許されるが、これをどんな風に受け取ったらいいもので

あろうか、わかりかねることだと、新聞は書いたのである。同時に編集局は――明らかにボヘミアンたるシュトライヒャーに当てつけて――神をなくした近代劇場が、青年たちに及ぼす風紀退廢的影響を弾劾したのである。

おそらく、内容に乏しいといえる舞台作品の慎ましい成果をきっかけにして、《ザルツブルク大衆紙》編集局は、ときおり 19 歳の作者に寄稿してもらうこととなった。トラークルは事実この新聞に 1906 年と 1908 年、二三の散文作品を、それも抒情的小品と気分的形象に包まれたものを、1909 年にも多数の詩を（そのなかには『ヘルブルンの三つの池』『聖ペテロ墓地』『過ぎゆく者に』『祈祷』それに『完成』がある）発表した。詩人のかなり後期の作品は、新ロマン主義の時代様式たる雑文主義に一つの絶対的対比を示しているが、気分的雑文で始めているのを見ると、奇異の念に捕らえられるのである。

初めて新聞に掲載されたのは（1906 年 5 月 12 日号）、物語風の文芸欄ものである『夢の国』だった。副題で〈一つの挿話〉と呼ばれるこの神経細やかな小品には、予言的な文章がある。詩人が、語り手の叔父である老人に言わせる〈おまえの魂は苦悩を追いかけることだろう〉という文章である。『黄金の聖杯から』という表題で（数年を経て、ブッシュベックはこの表題を、トラークルの死後印刷された青年期詩作品集のタイトルに選んだが）、幻想『バルバラス』とオスカー・ワイルドの《サロメ》を思い出させる対話『マリア・マグダレーナ』が続いた。さらに別の新聞、すなわち《ザルツブルク新聞》に、同年、すでに真の《トラークル的》散文である『孤独』が掲載された。これらの感傷的な文芸作品は、どれもが、その見え透いた中身と極端な問題を抱えているにもかかわらず、写実主義者の眼差しを見せているし、典型的な新ロマン主義的特質を現わしている。同時代の流行小説を鋭く断罪する書評、〈ガリア小説は前例を見ぬ形式崇拜の頂点を示しており、ロシアの市井叙事詩は強力な精神革命の源になったが、これらのことをよく考えてみれば、われわれ中部ヨーロッパの小説作品の大部分が、印刷に値する原稿とはもはや思えないのである。〉この書評と並んで、トラークルのメンートルであり保護者であるグスタフ・シュトライヒャーの朗読に対する批評も出た。（これは目を見張るばかりの《専門家の成熟さ》で書かれている）。シュトライヒャーは 1908 年 2 月、ミラベル会堂で〈自然主義者たちが好むような例の魂の悲劇〉、すなわち戯曲の中の詩《モナ・ヴィオランタ》を朗読したのである。トラークルはこの批評で、創造的諸問題に対する驚くべき鋭敏な知性と確かな判断力と洞察力によって、若干の文章をものしているが、それは彼自身の詩作や意欲とも関連するものであろう。〈不思議にも、なんとこれらの詩行はその主題に浸透し、なんとしばしば言葉の響きが言い表しがたい思想を表現し、逃れやすい雰囲気をつっかりと引きとどめていることだろう。これらの詩行には甘味な何か、女性的で人を説得させる何かがあり、それこそが言葉の旋律に耳を傾けさせ、言葉の内容や重さには注目させないのだ。この言語の短調の響きは、感覚という感覚を物おもわしげな気持ちで包み込み、血液を夢のような疲労で満たす。指揮者が登場する最後の場面で、ようやく力強い青銅のような長調の音が鳴り響く。そして急速度で高まりながら、生の喜びというディオニゾス的な歌声に包まれて、このドラマは終わるのである。〉

またしても、ふたつの関係ない完全に別種の戯曲からなる一幕物『蜃気楼』は、同年初秋の 9 月 15 日、甚だしい不評をこうむった。地方紙のそこそこで、ホフマンスタールの気取った文体にふさわしい荘重な言葉の華麗さが称揚されはしたものの、奇矯な主題は滑稽さと紙一重のものだと見なされ、戯曲としてのまとめ方の不十分さも――おそらく正当であろうが――きびしく批評された。トラークルに好意的な《ザルツブルク大衆紙》さえが、本物の劇作家としてはまだ成熟さに欠けているし、舞台作家になる功名心は当分抑制しなければならないだろうと、丁重にほのめかしたのである。

最初の戯曲の必ずしも確かなものではないお義理の喝采――それも多くは両親の社会的名声のおかげに違いなかった――それに加えて、トラークルの自身を打ち砕く二度目の全体的な拒絶。こういう試みを（それを説得して実行させたのはシュトライヒャーだった）トラークルがあえてしたのは、今日では確かなこととして想像できようが、

ギムナージウムを強制的に退学させられて以来、自分を二流と見なした以前の級友たちに、ただおのれの独創性を実証するためだった。この考えも失敗に終わった。文学サークルの友人たちさえ興味を示さなかった。他の者たちについては、言わずとも知っている。各方面で――両親の家でさえ――トラークルは腹立たしい、なんとも理解できぬ無関心に出会ったのである。ブッシュベックだけは支持してくれたが、やはり批判的な論評を隠さなかったようである。

トラークルは拒絶のあらゆる痕跡を入念に抹消した（遺稿中に初演のプログラムだけは発見されたが、それを破棄することはしなかったのであろう）。功名心を傷つけられ、名誉欲も困難に遭遇し、トラークルは陰鬱で不快な気分になり落ち込んだ。創造力が衰えたのである。怒りっぽくなって、すべてのことから身を引いた。ある挿話の語るところによると、当時、悪らつな新聞批評に対して公然と憤懣を漏らし、トラークルを悪し様に扱っていたカトリック系の《ザルツブルガー・クロニク》を、喫茶店で大声で〈悪臭弾〉と呼び、ボーイに持ってくるよう頼んだそうである。

しかし彼は諦めなかった。1907年中には抒情詩もほとんど成立しなかったが、少なくとも三幕物の悲劇『ドン・ジュアンの死』を（ひょっとするとレーナウの《ドン・ジュアン》に刺激されたものかもしれない）起草していたようだ。その断片が見つかっている。シュネーディッツがザルツブルクの遺稿のなかに、ノートに書かれたふたつの場面を発見したのである。おそらくはまだ草案で、二三の異稿があろう。全部でわずか六枚にすぎない。このドラマは1908年か、遅くとも1909年にはできあがっていたのであろう――同時期の日付を持つ詩稿と比較せよ、そうすれば、模倣的文体からこのことが推測できるのである――、これは完結した長編劇だったことをフランツ・ブルックバウアーが証言している。トラークルが全体を読んで聞かせたのは、ようやく1912年のことで、ブルックバウアーは《ドラマ的な過程の魅力よりも、壮麗で実に新鮮な響きを持つ言語の魅力にいつそうひかれた》と述べている。

この朗読の後、数日を経ずして、トラークルは友人に作品を焼却したと伝えた。たぶん芸術的理由からであろう。それというのも1910年から1912年にかけては、すでに十分成熟した詩が若干成立しているからである。

もう一つの、本来はずっと後にできあがった戯曲が、人形劇『グローバル』である。これはすでに若い創作者の倒錯的手法を際立って示しており、抑圧作品また疾風怒涛詩として得るところは多大だが、血なまぐさい大人形芝居的な小戯曲で、八枚の個々の紙片にいたるまでわれわれの手元に残されている。この短い作品は――ひょっとすると前座劇として――アントン・アイヒャーのザルツブルク人形舞台用に（しかし証明可能だが、この舞台ができたのは、ようやく1913年のことである）考えたものであろうと、ゼーバッハとフィッシャーは推測しているが、原稿の表題紙の日付から認められるように、1910年2月5日と6日に書き下ろされたのである。遺稿のなかから発見された原稿は、最終稿でないのは十分確かなことであり、おそらく最終稿にいたることはなかったであろう。

すでに導入の詩句からして〈前口上〉と題されているが、特別な様相を呈している。

おまえは嘆くのか 正しき人よ この錯乱した姿を
嘲笑と狂気にかき乱された姿を
私を信じてほしい 私たちが再会するまで
わが主人公は慎ましい道を歩いてゆくだろう！
アーメン！

誇張という点で、プラーデルの騎士劇を思わせる擬古的な言葉の使用（〈・・・心よ・・・汝やさしい花嫁・・・イエズス・クリステ・・・おお 楽しげに夜と触れあいながら・・・〉などなど）。韻を踏んだこの人形劇は、まじめな詩作品というより、むしろ

る作者を臨床的に解きあかすものである。

おお真夜中よ 汝 欲情せる花嫁よ
青ざめつつ 死の花へと老いさらばえる――

このような詩行、あるいはまた〈禿鷹どもがまたしてもあたりを飛び回る・・・血塗られた花嫁の夜・・・神・サタン・・・夜は狂気に満ちている・・・月が泥酔した娼婦のように見つめる・・・アスラエルの羽ばたき・・・ぶる！ぶる！ まあなんと身震いし 気味悪くさせることか！・・・いもりやユリの花を欲情させるこの月夜〉といった使用法や途轍もない語彙も、まさしくぞっとする効果を狙う乱暴きわまりない欲求であり、結果としては反対になってしまう。この作品は今日なら哄笑を誘うであろうし、作者を知らなければ、おそらく常にそうであろう。だから次にあげる詩行を見て、背筋に冷たいものが走る者はいないであろう。グローバルの次の犠牲者エリザベートが、〈まるで魔法にかけられたように〉語る詩行である。

おいで 愛するひと！ 激情の火が私の髪を伝うの
決して 決してわからない きのうち何が起きたのか。
血は止まり 喉は息苦しくなるの
心休まる夜は もうないのだわ！
裸体を陽にさらしながら 歩き回りたい
目という目に私をさらし
苦痛に苦痛を加えてほしいの
そうして狂ったように激怒に駆られているあなたと苦痛を分かちあうのよ
かわいいひと おいで！ 私の情熱を飲み干して！
私の血に渴いていないの？
燃え立つような髪の色に？
聞こえないの 森の鳥たちの叫びが？
すべてをお取り 私の存在のすべてを――
強いひと――私の命――奪い取ってちょうだい！

あきらかに見せ物的な努力と、青春期の詩に見える悪魔主義に似かよったサドマゾ的な放逸。〈デーモンが病める魂をくぐり抜けていく・・・夢みる男がお腹の大きな女たちを見ている／ぬらぬらと輝きながら通りすぎる女たちを〉といった詩行が、このことを語っている。この恐怖・詩作品の創作者を考えるには、終わりの演出注も、得るところが多い。〈グローバルは彼女を深淵に引きずり込む。かん高い叫び声が聞こえる。次いで深い静寂。しばらくするとグローバルが姿を現わす。血をしたたらせ、陶酔にわれを忘れて。それからなぎ倒されたように、キリストの磔刑像の前にひれ伏す。あかりが消える、神よ！〉

又してもわれわれが会うのは、すでに『聖者』や『祈祷』のような早期の詩に刻印されていたが、せき止められることによって誤った軌道に向かう性の吐息と、まさしく上述のような神に対する畏敬の喘ぎである。これは、最も早期の成熟詩のいくつかをすでに書いていた 1910 年に、トラークルが相も変わらず、思春期の世界観と性的空想に後戻りしながら没頭していた印しである。

極端な表現をすれば、トラークルは、1908 年当時は精神的に言えば犯罪者だったと、シュネーディツは述べている。あのころ特別に常軌を逸した性生活があったかどうかは確認できぬが、凶悪な空想力を展開し、犯罪や倒錯的思考にふけていた。そこで宗教的解釈者たちのなかで、最も深くトラークルの苦痛を理解したエルヴィン・マールホルト博士は（1925 年、トラークルのあとを追い 25 歳で自殺した）、研究論文《人間と詩人 ゲオルク・トラークル》で次のように書いたのである。《力強く性の衝動が目覚め、彼を引き倒す。〈彼の頭上に悪の影が立ち上がった・・・〉トラークルは、ヴァイニングターの言う天才のふたつの危険を身に帯びていた。犯罪者たる危険は早い時期に克服し

た。彼の無愛想な顔つきに、鎌首をもたげるようにしばしば現われ、いわば石にされたかのように人々を怖気させはしたが。しかしトラークルは、死にいたるまで狂気への全体的な滅びを恐れていた。狂気は、際限のない憂鬱者を、すでに幾度となく捕らえていたのである。》フリードリッヒ・ヨハン・フィッシャーは、遅すぎる『グローバル』憑依にたいして、物質的な理由も挙げている。父親は当時すでに年老いており、体の具合もよくなかった。父の店が駄目になり、家族からの経済的支援も失うことになるというのが、トラークルにはわかっていたし、感じもしていたと言うのである。芸術家として生きていく物質的な前提条件が、悲劇的動揺に見舞われるというこの予感が、未来の定住地喪失感が、事実『グローバル』の夢精を引き起こしたのかもしれない。

意図的に、われわれはこの人形劇に長いこととどまった。思春期後の平地のなかでは、滑稽な（それ故、ジャン・パウルによれば逆に高貴な）作用しか及ぼさない恐怖譚詩の精神錯乱的滅びの気分は、後期のいわゆる戯曲断片にも見いだされるが、そこではもちろん呪われた種族の没落という啓示的な夢の様相へ高められている。われわれはためらいなく『グローバル』を、あの頂上を極める作品の前段階、あるいは下段階と見なすのである。そしてさらにこの後期の断片を、トラークルの最高の試作品、また同時にドイツ語圏表現主義の最も天才的な創作に数えることもためらわぬ。表現主義については、所定の場所で語られるであろう。